

---

# パパのいうことを聞きなさい！ IFストーリー

夢を忘れた者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パパのいうことを聞きなさい！ IFストーリー

### 【Nコード】

N0827X

### 【作者名】

夢を忘れた者

### 【あらすじ】

大学に合格し、新生活をスタートさせたばかりの瀬川祐太と職業難のなか無事就職をした瀬川虎牙は、新しい友人や憧れの人、同僚に巡り会う。しかし祐太の姉夫婦が乗った飛行機が行方不明になった事で事態は一変する。一人暮らしの祐太の部屋に中学生の空、小学生の美羽、保育園児のひなが同居することになってしまった。困っている祐太の兄貴分である虎牙が手を差し延べる。思春期の女の子達のパパになってしまった祐太と虎牙の運命は！？ドキドキの同居生活に、祐太と虎牙を慕う少女達に憧れの先輩や同僚との恋も

絡んで大騒動！

ドタバタアツトホームストーリーー始まり始まり。

## 1話（前書き）

初文です。65%ぐらいは本から抜き出していますが気にせず読んでいただければ幸いです。

気にする方はバックして下さい。

## 1話

そう、君達がいるから強くなれる。  
どんな事があっても守ってみせる。  
だって俺達は、パパなんだから。

俺は瀬川虎牙。親戚の瀬川祐太とは兄弟の様に育った。彼は、親戚から視てもすさまじい人生を送っている。例えば、物心ついてすぐ両親を亡くし、遅しくバイタリティ溢れる姉に育てられたという波乱に満ちたスタートを切っていた。そして今現在は大学に入学し安アパートに住み始めたハズだったが彼の狭い部屋には、中学生、小学生、幼稚園児という三人の女の子がいる。なぜ？と聞かれたら面倒くさい前置きが必要になってしまう。まあ言えるのは、年頃の女の子はとにかくいろいろと難しい生き物であるということだ。そして、あるうことが俺達は、そんな難解な生き物のパパなのだ。そしてまた今日も波乱に満ちた一日が始まるのだった。

「……はダメー！」

朝っぱらから、安アパートの外に聞こえる小学生の悲鳴が響いた。

「朝っぱらから何しでかした。祐太の奴は。」

俺はため息混じりに呟いているとさらに怒鳴り声が聞こえてきた。

どうせ困っているであろう弟分を助けるために彼の部屋に向かいドアをノックした。

「はい」

先程の小学生の声が聞こえ少ししてドアが開いた。そこから顔を覗かせているのは金髪で俺の胸の辺りまでしか身長のないツインテールの少女が出てきた。見た目はアイドルばりの美少女が俺を見上げて「いらつしゃい。虎牙叔父さん。」

と言って出迎えてくれた。「朝忙しい時に来てごめんね。美羽ちゃん。」

そう断わりを言って部屋に上げてもらった。

「いいえ。大丈夫ですよ。今から、朝食にしようとしたところでしたから。」

そう言つて笑顔で朝食であろう、トーストとサラダを運ぼうとしていたので

「俺が運ぶよ。」

断わりをいれつつ彼女が持つ前に俺は朝食を持ち、奥の部屋に運んだ。そこにはセミロングの髪をした中学生の空ちゃんと、黒髪で長髪の幼稚園児ひなと、俺の弟分である祐太が待っていた。

「おはようございます。虎牙叔父さん。」

「おはよう。虎牙おいたん。」

「ああ。おはよう。二人とも元気そうで何よりだ。」

挨拶を交わしこの部屋の主である祐太に

「おはよう。すまないが台所借りるぞ。」

伝えたい事を簡潔に言い台所に向かった。後ろから

「おいしいやつを頼むよ。」

と言われたが短時間で作る料理にそこまでのレパートリーがなかったので、半熟目玉焼きを作り持って行った時、空ちゃんが持っていた牛乳パックが噴き出し持っていた半熟目玉焼き×4に降り注いだ。

「……あつ。」

4人の声が重なった。俺は無言で皆（ひな以外）の所に配り

「早くしないとひなの保育園に遅刻するぞ。急いで残さずに食べなさい。」

笑みを浮かべて言うと

「「「わかりました。」」」

ひきつった笑みを浮かべ空ちゃんと美羽ちゃん、祐太が目玉焼きを頬張り急いで準備を始めた。

彼らの心境は

「『虎牙叔父さん。怖い。』」

『虎兄。怖すぎる。殺されるかと思った。』

そんな風に思われているとは知らずに、この後の食べ終わったひなを保育園に送り、会社に行く……

未婚のハズなのに三児のパパの立場を体験することになるなんて、想像してなかったなあ。まあ、俺達5人、楽しく肩を寄せ合って暮らすこの八畳間の生活は

こんな感じで始まったのだ。

## 1話（後書き）

駄文ですが楽しんでいただければ幸いです。



## 2話（前書き）

祐太とオリキャラの会合前までです。

駄文ですがよろしくお願いします。

本文をどうぞ。

## 2話

話は少し戻って4月上旬。  
まだこれから起こる事を知らない俺達は普通の学生と社会人として  
過ごしていた。

side 祐太

入学してから二週間俺は新歓コンパで知り合った仁村浩一と友達になつた。それからしばらくして、入学式以来連絡していなかった姉さんから電話がかかってきた。近況を報告した後おもむろに姉さんが驚くべき事を口にした。

『そういえば虎ちゃん（こうちゃん）がこつち側の会社に就職出来たから、挨拶に来るって言ってたわよ。会う機会が少ないんだからから会いに来ない？それにひなに祐太の顔を覚えてもらいたいのよ。』

『えっ！虎兄こうにいが帰って来たの？！』

俺が驚くのも無理もない、何故なら【武者修業に行つて来る】と言つて三年前に音信不通になつていたからだ。俺はしばらく考えた後「わかつたよ。姉さん。いつ行けば良い？」返事を返し【じゃあ。お盆になつてから来なさい。】と言われ、まだまだ先だが楽しみにしているとおもむろに

『あつ。そうそう、その日半日だけうちの子達の面倒みてくれない？』

「……………は？」何故か予想外の返事が返ってきてしまった。

side 祐太 out

side ????

「ふっ。雑魚が！」

こちらに来て早々、絡まれ易い雰囲気からか、良く因縁をつけられる。本日十組目はヤクザみたいな人達で、20人ぐらい居ただけど軽くノしてやった。去り際にリーダー各のサングラスをかけたオッサンから【お前何者や?】と問われたので高校の時付いた通り名を告げた。

「黒き修羅」

簡潔に答えその場を去った。

side 黒き修羅 out

彼が去って数分後、ノビていた手下達が眼を覚ましてきた。手下の

一人がリーダー各の男に向かい

「アニキ。すぐに奴を探し出し八つ裂きにしますか?」

と今後の行動を確認しに来たが、アニキと呼ばれた男は聴いている様子がなく、去った男の方を見たまま固まっていた。アニキと呼ばれた男はただひと言手下に告げた。

「この街から逃げるぞ。」

「はあ?」

言われた事が理解できず問い返すと

「『黒き修羅』!!それで分かるだろ。」アニキが言った意味を理解し身体の芯から震えだした。

『(黒き修羅) 彼には手を出すな』これは日本中にいるヤクザたちの共通認識である。三年前一つの事務所がたった一人に潰された。

その組全体で報復をしようとした所、男子高校生がたった一人で乗り込んで来た。彼は籠手と刀という格好で千人のヤクザと組長を病院に送り、その地域に居たヤクザ達を追い出した。これには警察も黙っていなかったが、その高校生の素性は一切分からなかった。ただ一つその組の組長に言った事が大きく取り上げられた。

『あんだ達が裏でなにしようとして別に邪魔はしない。だが、俺の家族に危害が及ぶ様なら容赦なくお前の家系の者、ペットや愛人、子供、関係者全てを探し出して殺す。』

これを聞いた他の地域に居たヤクザがそこに勢力を伸ばそうとした時、同じ様に組まるごと潰された。数人同じ様に来たが、全てが三日以内に潰された。これにより、日本中にいるヤクザ関係者全てが認識した。それが『(黒き修羅) 彼には手を出すな』と言われる訳である。

## 2話（後書き）

戦闘シーンは機会があれば書いてみます。

ご意見、ご感想お待ちしております。

### 3話（前書き）

今回本文が短くなりました。

主人公らしき奴はでてますが本格的に出てくるのは次回からになります。

拙い文ですが気にせず読んで下さい。

では本文どうぞ

### 3話

そして時が流れ、約束の日になった。

side 祐太

あつという間に約束の日が来た。俺が姉の家を訪ね、そこで三年ぶりに虎牙兄さん（虎兄）と会うという儀式めいた日だ。ちなみに俺の夏休みはバイトとゲーム意外では消費されていない。サークルである路上観察研究会には時々行くが別に活動をしているわけでもない。サークルで織田菜香さん、佐古俊太郎先輩に出会った。

（その辺は原作を読んで下さい。）

それはともかく、日射病になるんじゃないかと思うぐらいの暑さの中、俺は一度しか来たことのない道に悪戦苦闘していた。

「うーん……こっちで良かったよな……?」かすかな記憶をたよりに住宅街を走る細い路地を歩いていく。

ここは豊島区池袋。JR池袋駅の駅前はその都会らしい賑やかさだ。だがしかし、そこからほんの少し離れるだけで一気に様子が変わり、古くからの住宅街が残っていたりする。

「……暑いな……」

まだ午前中だというのに、足下のアスファルトからは妙な熱気がかんかん立ち上ってくる。いかにも夏らしいギラギラと照りつける太陽を見上げると、なんか恨みでも有るかのような気分だ。そんな日に、大学のある八王子の山奥から姉さんの家があるこんな都心まで出向いて来ていた。

「お、あつたあつた」

緩やかな坂を上がると目の前にはテレビドラマに登場しそうなシャシた一軒家が現れる。

「しかし……相変わらずデカいな。」

姉さんの夫の姓は『小鳥遊<sup>たかなし</sup>』。大昔からこの辺りにある家で、戦前は大地主だったらしい。だが今はそのようなことはなく、持っていた土地は一族に均等に分配され、残っているのはこの家ぐらい。と姉さんが言っていた。

深呼吸をして気持ち落ち着かせてインターホンを押すとすぐにスピーカーから可愛らしい声が聞こえてきた。

『はい、どちらさまですか？』

「えっと……あなたのお義母さんの弟の瀬川祐太です。」

『ああ、わかりました、すぐ玄関を開けますね』

はあ……よかった。「アナタなんか知りません」なんて言われたらどうしようかと思った。少し待っていると、トタトタと足音が聞こえてきた。

「お待たせしましたあ！」

玄関を開けて顔を出したのは、長い髪をツインテールにしたアイドルばりの美少女

「わあ、お久しぶりですう。覚えてますか？ あたしのこと」

side 祐太 out

祐太が美少女に出会った頃一人の男が池袋駅の駅前にたどり着いていた。男は深呼吸をして空気の匂いで帰って来たことを実感し不適に笑った。



### 3話（後書き）

美羽「質問コーナー!!」

ドンドンパフパフ

空「い、いきなり始まりました、し、質問コーナー。この場合は『読んでくださった皆さんの質問に答えていく』という場です。えっとキャラ崩壊もあるかもしれないので気を付けて下さい。」

美羽「お姉ちゃん。堅いよもつとリラックスリラックス。」

ひな「そうだお。気楽に気楽に。」

空「妹に諭される姉って?」

美羽「アハハ。気をとりに治して質問に行っちゃおうか?」

ひな「うん。みかぐら みなとさんからいただいたお。ありがとうだお。虎牙おいたんは何歳ですか?ヒロインは誰ですか?」

美羽「作者の設定では23歳で、ヒロインはまだ本決まりでは無いですが一人考えてるそうです。うん?何お姉ちゃん?私が言う?どろぞろぞろぞ。」

空「ええつと、そ、その人はまだ出てないけど、確か私たちのし、知り合いの妄想少女だそうです。」

美羽「お姉ちゃん緊張しすぎ?」

三人「ご意見ご感想お待ちしております。次回もお楽しみに。」

祐太「俺の出番無し?!」

#### 4話（前書き）

祐太と再開する前の話になります。

## 4話

泣いている人がいる。泣いている子供がいる。憎たらしく笑う大人がいる。誰にも気付かれず果てる人がいる。力持つ者がむやみに牙をむき、弱者を強いる。そんな世界だから俺は……

side 虎牙

長い様で短かったこの三年間、俺はアラスカ〜メキシコ（ワシントン経由）を走破した。

途中いろんな場所に立ち寄り自分の見聞を広げていき、様々な人と接してきた。例えば偶然助けた少女はマフィアのボスの愛娘だったり、軍基地の近くに居たら軍人に絡まれたので返り打ちにしたり、その事が原因で逆恨みされ何度か絡んできたので、相手をするのが面倒くさくなったのでその軍人の上司に言いつけたら、絡んでこなくなつたとか。それはもうたくさん接してきた。

そんなこんなしていると義姉の祐理さんから連絡があり『結婚したので顔を出しなさい。』というものだった。そういえば出て行く時も何も挨拶していなかった事を思い出し、少し自責の念に陥ったが気持ちを切り換えて戻る事を決めた。

帰国する前日お世話になっていたマフィアのボスとその愛娘にお礼を言い、荷物をまとめた。帰国して近くの繁華街をウロウロしていると路地裏から悲鳴が聞こえてきた。周囲にいる連中は聞こえていないようにしていた。『厄介事に関わりたくない。』そんな保身的な雰囲気かでていた。深くため息を吐くと路地に入りそこにいる人に声をかけた。

「なにしてんの？」

side 虎牙 out

side 北原栞

友達の都合が合わなくて私が一人で買い物をしていると数人のヤクザ風の男達に声をかけられた。

「そこ行く彼女。一緒にお茶しない。」

「お断りします。」

きつぱりと断わるとドスを効かせて

「調子乗んなよ！このアマ！！」

怖かった。殺されると思った。腕を掴まれ路地に引きずり込まれた。何をされるか分からないけど、身に危険を感じて大声で助けを求めた。けど誰もこちらを見ない。「関わりたくない」そんな雰囲気がかもしたしていた。体が震える。喉が渴く。怖い怖い怖い怖いコワイコワイコワイコワイ……誰でも良い。誰か誰か私を助けて！！

「なにしてんの」

絶妙なタイミングでその人は現れた。闇を彷彿とさせる髪、ほどよく焼けた肌、無駄の無い体格。遠目で視てカッコイイと思った。その人はゆっくりこちらにやって来る。けどヤクザ風の男は近くにいた仲間に『殺れ』と言った。その人はナイフを取り出し、声をかけてきた男に走り出しタックルをしかけた。声をかけてきた男は近付いてきた男の手にあるナイフに気付くと、その手を蹴りその衝撃でナイフを落とした所でパンチを軽く顎の先を殴った。ナイフを持っていた男はフラフラしたと思った瞬間後ろに吹っ飛ばされた。

「うーん。加減が難しい。」

眩きと共に私を抑えていた。リーダーらしき人が

「お前はいつたい何者だ」

声が震えていたが威厳に満ちた態度で聞いていた。声をかけてきた彼はその態度が気に入ったのか嬉しそうに

「まだ骨のある奴がいたか。……地獄の土産に教えてやるよ。……黒き修羅……」

その名を聞いたヤクザ風の男達は青ざめ震えだした。「今は気分が良い。見逃してやるから早く消えな！」

そう言われヤクザ風の男達は素早く逃げ帰った。

そんな男達の態度とは裏腹に私は彼に見入っていた。路地の隙間からの溢れ日が彼を一層神秘的なモノに変えていった。ふと気付くとその人は何処かに消えていた。『もう一度会えたならお礼を言わなくちゃ。』今更の事に気付きただ、再会を望んだ。……彼女の願いは数週間後に叶う事になるのであった。

side 北原菜 out

#### 4話（後書き）

ケンカシーンを出してみました。いかがでしたか？  
自分の文才ではこれくらいが限界です。雰囲気が出ていないので、  
またこいつのがある時はちょっと過激にしてみます。（流血が多く  
なるかと）

ご意見、ご感想お待ちしております。

## プロフィール(前書き)

修正しました

## プロフィール

瀬川 祐太 せがわ ゆうた

普通の大学一年生。特別取り柄もなく、友達を作るのも苦手な方。両親を亡くしており、姉に育てられた。虎牙とは幼なじみで実の兄の様に慕っている。

瀬川 虎牙 せがわ こうが

社会人一年目。母方の実家が武術家一家なので、幼い頃から鍛えられ、学生時代は『漆黒の修羅』と呼ばれていた。筋が通らない事を嫌うが、ある程度なら容認している。家族の事をバカにされる事を嫌い、そんな奴には容赦しない。祐太とは幼なじみで弟の様に可愛がっている。

小鳥遊 空 たかなし そら

中学二年生の美少女。すっかりもので妹思いの長女。思春期真っ只中で、祐太と虎牙との生活に一番悩みが深い。

小鳥遊 美羽 たかなし みう

アイドルばりの美貌を誇る10歳。女子力の高い小悪魔系。姉妹の絆は強いが、よく空をからかっている。

虎牙の事が気になっており、それが恋愛感情か、それとも別の感情なのか分からず困惑している。

小鳥遊 ひな (たかなし ひな)

3歳の保育園児で、人なつっこく可愛い女の子。祐太のことをおいたん、虎牙のことは虎牙おいたんと呼んで慕っている。

北原 栞 (きたはら しおり)



小鳥遊家の向かいに住む女子高生。思いこみが強い。ヤクザ風の男達に絡まれている所を虎牙に助けられた。その後再開し惹かれ始める。

菅谷 ミキ（すがや みき）

祐太と同じ大学に通う女子大学生。丸顔で幼さの残る顔立ちでウェーブのかかった髪をしている。小鳥遊家に行く筈が迷子になっていた虎牙を助けた。数日後に偶然再会。その後ちよくちよく見掛けるようになった。再会時の出来事で虎牙に好意を抱いている。

佐原 よし子さわら よしこ

祐太と虎牙の親戚。祐太達の母親だと思って苦言を言う役を買って出ている。

虎牙の過去についてある程度知っている人の一人。

小鳥遊 信好たかなし のぶよし

信吾の兄。性格もうりふたつで姪っ子バカ。

小鳥遊 信吾たかなし しんご

空、ひなの実父。娘バカなところがあり、行き過ぎた愛情を愛娘に注いでいる。余りにも行き過ぎな場合は祐理に叩かれてしまう。バツイチ

小鳥遊 祐理たかなし ゆづり

ひなの実母。活発で明るく楽しい人。虎牙の過去について詳しく知る唯一の人。

## プロフィール（後書き）

ご意見ご感想待ってます。

## 5話（前書き）

もう一人のヒロイン候補との出会いになります。

駄文ですが楽しんでいただければ幸いです。

## 5話

side 虎牙

勘を頼りにブラブラ歩いているとどこかで見た風景が見えて来た。

「……………池袋駅……………」

何を隠そう俺は軽い方向音痴なのだ。

一度行った場所なら迷わずに行けるが、初めての場所では100%迷ってしまう。ふとある事に気が付いた『そういえば家の場所を聞くの忘れてた。』帰るとは連絡をいれたが、何処に住んで居るかは聞いていなかった。ここまでは昔からの付き合いの奴に聞いて来たのだが、ここから先は全く分からない。今更ながらに膝をつき絶望している。

「大丈夫ですか？」

声をかけて来る人がいた。その人はカールした髪型の可愛い女の子だった。

side 虎牙 out

side 菅谷ミキ

「大丈夫ですか？」

私は池袋に用事がありました。その用事も終わり帰ろうと池袋駅に

向かっている途中、前の方にいた黒髪の男の人がいきなり膝をつき何かのうち震えていました。体調が悪くなったのかと思い、つい声をかけてしまった。

その人は闇を彷彿とさせる黒髪、黒一色の服装、細身でしつかりとした体型、軽く日に焼けた肌、そんな姿に一瞬目を奪われボーと見入ってしまった。

「あの、大丈夫ですか？」

話し掛けたのに逆に心配をかけてしまった。

「は、はい。そちらこそ大丈夫ですか？」

「あつ。すみません。親戚の家に行きたいんだけど、どこにあるのか分からなくてちよつと途方に暮れてただけだから。そうだ！この辺りに住んで居るなら場所が分かるかもしれない。」

そう言つてこちらを向き微笑しながらある場所の住所を聞いてきた。なので私は分かる範囲で説明した。その人は一度言つた事を忘れず、説明した通りに歩いてみると言つて、颯爽と歩いて行った。私は彼の後ろ姿が見えなくなるまで見送っていた。

side 菅谷ミキ out

side 虎牙

右往左往して漸く目的の義姉の家にとどり着いた。玄関に進もうとした時、玄関の扉が勢い良く開き中から、三人の女の子が出てきた。三人の内金髪でツインテールの美少女が話掛けてきた。

「あの〜。どちら様ですか？」

「ああ。君達の親類だよ。」

至極当然な問いに簡潔な答えで返した。彼女達は驚いた様子でこちらを見ていた。

side 虎牙 out

side 美羽

私達がスーパーに買い物をしに行こうとして玄関を開けると家の敷地に入ってくる男の人がいました。その人は『自分は親類だよ』と言ってきました。そして私達が驚いた表情を見て苦笑し『ウソじゃないよ。小鳥遊美羽ちゃん。後ろにいる幼い方がひなちゃん、となりにいるカーネーションを付けた若干オタク気味なのが空ちゃんだったかな?』と言ってきました。私たちは再度驚いた。お姉ちゃんのおタク趣味を家族意外で認知している人はいないはずだったのにその人は知っていた。お姉ちゃんはひなと一緒に脅えている感じだった。私は相手の人に質問しようとした時、家に電話がかかってきた。相手はお母さんで内容は『もう一人あなた達に会わせたい男の子がいるのよ。その子は私の弟分で服装は黒一色の衣服をいつも着ていて、雰囲気がいまいな奴だけど面白い奴だから来たら仲良くしてあげてね。』ということだった。この事を教えるとその人は『はあー』と深いため息を吐き、気分を切り替えたのか微笑を浮かべて

「買い物に付き合うよ。」  
そう言っつて、私たちと一緒に買い物に付き合っつてくれた。帰り道の途中では、三人にアイスをおごっつてくれた。最初は驚いたけど良い人みたいで良かったと思つた。

s  
i  
d  
e  
  
美  
羽  
  
o  
u  
t

## 5話（後書き）

もう少しで祐太との再会になります

ご意見、ご感想お待ちしております。



## 6話(前書き)

今回短くなっています。

## 6話

side 虎牙

小鳥遊家に帰って来ると家の中から叫び声が聞こえてきた。

「……………にとくと刻むがいい！父の愛の深さを！」

「何だ何だ。ヤクザでも出たか？」

「あれって間違えないね。」

叫び声を聞き、俺は検討違いで物騒な事を考えていた。しかし、この叫び声の正体を知っているのか美羽ちゃんは、大きなため息を吐き出していた。別に自分には関係無いと思いきや家に入ろうとしたら、目の前には靴べらを降り上げて祐太を襲っている奴がいた。しばらく傍観していると、愛する娘のため修羅と化した男（娘バカ）が獲物の靴べらを大きくふりかぶったその時

「いい加減にしろ！このバカ亭主！」スパコーンと小気味よい音を立てて男の頭をスリッパで叩かれた。叩いたのは幼なじみの姉にして俺をここに呼んだ人物だった。

side 虎牙 out

side 祐太

さっきまでの修羅から一転、俺にとって義兄にあたるその男性はすっかり穏やかな中年に戻っていた。どちらかといえば内向的な雰囲気の人なのだが、さっきの殺気は本物だった。

「まったく……………信吾さんは思いこみが激しいのよ。虎牙君が相手だったら殴られるだけじゃすまされなかったわよ。」

「……………なかなかやるな。ひなちゃん。だがこれはどうかな。」

我が最終奥義を受けよ。オリヤツ、オリヤツ、オリヤツ、ドリヤア  
ー。」

話題になっている虎兄はひなと一緒に、ホームランバーみたいなコントロールを振ってチャンバラをするゲームをしている。良い勝負をしているのかひなはご機嫌だ。虎兄の連続技が決まりひなが負けると虎兄はひなに近づき

「俺の連続技使わせるなんて、ひなちゃん強いな。」

と頭を撫でながら褒めていると義兄さん（にいさん）が勢い良く立ち上がり

「キサマダレノユルシヲエテヒナニサワツテイル。」

表情を消した顔で虎兄に対し話し（威嚇）掛けた。そんな緊張の中、ひながとんでもない提案を出してきた。

「パパと虎牙おいたんで勝負して。」

そんなひなの提案に乗り、義兄さんはコントロールを持ち、面倒くさいと言いたげに虎兄もコントロールを構えた。

「祐太。ひなちゃんの相手をしてくれ。」

そう言っただけで始まるのを待ちだした。虎兄が何をするのか気付いた俺はひなと一緒にその場を離れた。ゲーム内容はあまりにも一方的だったため結果だけを記載させてもらいます。勝者……虎兄

side 祐太 out

## 6話（後書き）

いかがでしたか？  
ご意見ご感想待ってます。

## 7話（前書き）

今回も短くなってしまいました。  
今後からは、このくらいの量になると思いますが頑張っ  
て続けて行く所存です。

では、本文スタート

## 7話

side 虎牙

一方的なゲーム(ワンサイドゲーム)を終えてさすがに顔で俺は祐理の姉御(通称・祐理姉)に今回帰って来るように言った訳を聞いた。解答は『家族を紹介したかったから』という俺から言えば下らない事だった。

「……パパだって頑張ったんだぞ？」

「うん、ありがと」

祐理姉と話し込んでいる時に何かあったらしく、空ちゃんがあっさりしたお礼を言うとその前から扱いが酷かったのか娘バカが、ソフアで丸くなりいじけてしまった。

「ほらほら、信吾さんイジケないで。信吾さんが頑張ったのは私が知ってるから」

「ゆ、祐理さん……！」泣きながら祐理姉に抱きつく娘バカ。

そんな家族団欒を見れば、祐理姉が幸せだっけ事俺と祐太によくわかった。俺はそんな風に誰かと家族を作るとか考えたことがなく、『俺もいつの日かこんな家族が出来たら良いな』なんてガラにもなく考えていた。数分後、祐太が大事な用で帰ると言った時俺は従姉妹にあたる三姉妹を見据えて

「じゃあ。俺も帰るか。」

そう言うつひなが俺と祐太の脚にしがみついて

「おいたん達かえちゃー」

と、抗議してきた。祐太がひなに今度来た時に泊まることを約束している美羽ちゃんが来て

「虎牙さんも今度来た時は泊まってくれて下さいよ」と言われたので約束し、久しぶりの日本で就活を始めることをこの時に決めた。

そのあと、祐理姉から再来週から一週間くらいの海外出張でない

から、その間の泊まり込みでの三姉妹の面倒をみる事になった。もちろんバイト代も出るので祐太も一緒に快く承諾した。今に思えばこの時祐理姉は自分がこのあとどうなるか気付いていたように感じた。

s i d e 虎牙 o u t

10日後祐理姉達の乗った飛行機が行方不明になった。

## 7話（後書き）

いかがでしたか？

虎牙と長女次女の関係は、美羽ちゃんは話が合う友達で、空ちゃんは接し易いお兄さんという設定です。

決して二人は、ヒロインではありませんのでご了承ください。  
ご意見ご感想お待ちしております。



## 8話（前書き）

飛行機事故から一週間の虎牙の行動です。

次回が長くなるのでその前振りになります。

では、本文スタート

## 8話

side 虎牙

飛行機事故が起こって一週間、俺は事実かどうか確認のため、世界中にいる俺の仲間達たちに連絡をいれた。

連絡をいれて2日、政府の見解が発表される前にアフリカにいるダチから『残骸が見つかった』と連絡が入った。一応確認のためアフリカに飛び、残骸を確認して周囲の集落に聞き込みをした。得られた情報は皆無だった。そんなこんなしていたら、葬儀に出席できなかった。8日ほどアフリカに滞在し情報が得られなかったので、一時帰国した。

日本に着くとすぐに、叔母にあたる佐原よし子さんに呼び出された。叔母さん曰く『祐太と祐理姉の子供の三姉妹と一緒に暮らしているので監視もかねて祐太達に会いに行きなさい』ということだった。

祐太が今安アパートに住んでいることを知ってその日の内に終わらせたかったのですぐに

「よう。元気か？祐太」

祐太に電話をかけて三姉妹の今後の事について話そうと約束してアパートに向かった。

side 虎牙 out

## 8話（後書き）

次回は祐太との話し合い。そしてある人達との出会いです。

お楽しみに

ご意見ご感想お待ちしております。

## 9話（前書き）

遅れてすみませんm（——）m

家庭事情により更新が不定期になりますが、完結を目指して頑張りますので、応援よろしく。

ではでは、本文スタートです。

## 9話

side 虎牙

祐太と話し合うため祐太が住んでいる安アパートに向かった。アパートに近付くと空ちゃんの叫び声が聞こえてきた。

「……………ないわよ！あんなこと！」

祐太まさか空ちゃんにゃんにゃんしたのか！？！？中学生に欲情したのか！？！？今からでも遅くない警察と精神科に行こう。などと考えていると叫び声が収まり静かになった。アパートの管理人の元に向かい挨拶を終わらせた後、祐太と三姉妹が居るであろう部屋に向かった。賑やかな声が聞こえて来る。明るく本当に楽しそう

## 9 話（後書き）

ご意見ご感想待ってます。

## 10話（前書き）

お待たせしました。10話です

まだ定期的に更新できませんが頑張ります

では、本文スタートです

10話

裕太とよし子叔母、俺で空ちゃん達三人の今後について話し合う事になった。

side 祐太

虎兄に呼び出され待ち合せ場所に着くとすぐに虎兄を見つけた。虎兄は今最も俺が会いたくない人と一緒にいた。

side 祐太 out

side 虎牙

祐太を待ち合わせ場所で待っていると、いつの間にかよし子叔母がいた。

「よし子叔母さん！！祐太との話し合いは俺に任せてくれるんじゃないかなかったのか?!」

少し問い詰める様に怒気を込めて聞いた。叔母さんの答えは簡単だった。祐太の覚悟を聴くことと、俺に裕太と三姉妹を任せるとのことだった。一応納得したので軽い世間話をしていると祐太が来た。さあ祐太お前の覚悟を聞かせてもらおうか!!

side 虎牙 out



## 10話(後書き)

少しずつ頑張って、更新していきます

ご意見感想待ってます

## 11話（前書き）

遅れて申し訳ないm（――）m

後書きにお知らせ有り

ではでは、本文スタートです。

## 11話

side 祐太

散々よし子叔母さんに言われた。そして二枚の手紙のような物をテーブルに差し出され

「これは……?」

「一つは、小鳥遊家の連絡先。もう一つは、私の知人が運営している児童施設の連絡先です。」

「児童……施設」

「相談したところ、一応、義務教育の間はあの子達が一緒にいられるようにしてくださるそうです。高校からは、仕方ありませんけどね。」

そう言われ、ほんの少し心が揺れた。向かいに座る虎兄は何か考えているようで、真面目な顔で俺を視ていた。その姿に少し戸惑いながらもよし子叔母さんの話を聞き続けた。

side 祐太 out

side 虎牙

よし子叔母がいろいろと厳しいことを言った。空ちゃんも美羽ちゃんも学校の現状、二人に迷惑を掛けない様にしていただけが、逆に気を使われていた事。祐太はそれを聞いて何かを感じている筈。これで何も感じない様なら今後一切手を貸さない事を決めており、この場の最善の方法も考えていた。言いたい事を散々言ってよし子叔母は立ち上がり

「虎牙君。会計お願い。じゃあ私はこの後用事が有りますから、二人で話し合いなさい。では、さようなら。」

そう言つて店を出て行きました。その様子を見て一回深くため息を吐き、祐太の顔を見てまた深くため息を吐いた。絶望したような顔をしていたので新たな選択肢を出した。

「祐太。もう一つだけ選択肢をあげるから選びな。・・・元の家に裕太と俺を含めた五人全員引越すだけだ。」

「・・・えっ、それだけ??！」

「ああ、これだけ。まあ俺はそこまでどうこう言つつもりは無い。さあどうする？」

案外簡単な内容だったため拍子抜けしたようだが、少し考えて頭を下げてお願いしますと頼んで来た。

祐太が了承したのを確認してある人物に電話を掛け、ひなの保護者参観日にある計画を立てた。

さあ楽しい楽しいパーティーの始まりだ。

s i d e 虎 牙 o u t

## 11話（後書き）

他のFFを書こうと思います。以下のいずれかで、人気が高いものを一つ書こうと思います。作品名の前にある数字を送って下さい。×切は11月15日23時59分までです。どうぞよろしくお願ひします。

- 1 魔法少女リリカルなのはシリーズ
- 2 イレブンソウル
- 3 ブレイクブレイド
- 4 舞 H I M E
- 5 I S インフィニットストラトス

以上5作品の内からお願いします。

ご意見ご感想待ってます

## 12話(前書き)

本当、遅れて申し訳ない

m ——— ) m

家庭内問題と就活でまだ不定期になりますが、全力で更新していきます( ^ o ^ )

ではでは、本文スタートです

## 12話

side 祐太

よし子叔母さんから散々抗議を受けた。ダメ出しとばかりに施設まで紹介された。悩んだ。吐気がするくらい考えた。頭が真っ白になった。けど答えは直ぐに思い描けた。姉さんや義兄さんと一緒に笑い合う彼女達が・・・

虎兄が真摯な目で、真剣に問掛けてきた。こんな目をしている虎兄には嘘はつけない。ただただ、真摯に自分の気持ちを告げた。これで何を言われても、後には引けない。

「虎兄。俺はあの子達が笑顔で居てくれるだけで頑張れる。例えそれが悲しみを先送りにする行為でも、今が一番大切だと思うから。

たぶん俺一人だと立ち止まりそうになるから。俺と一緒に彼女達のがん顔を守って下さい。お願いします。」

土下座の様に頭を下げ頼みこんだ。

side 祐太 out

## 12話（後書き）

### アンケート結果

#### 5 IS インフィニットストラトス

に決まりました。

この作品が一段落着いたところで初めようと思っ  
てます。早めに次の更新が出来るようガンバります。



### 13話(前書き)

遅くなって申し訳ありませんm)——( m

今回は一番長くなっております。

徐々に更新速度を上げられたら良いなあと思っています。

では本編スタートです。

### 13話

side 虎牙

ひなの父兄参観当日

小鳥遊家の親類の方々とよし子叔母さんを密かにひなの保育園の近くにある集会施設に呼び出した。

「本日こちらにお呼びだてした訳は至極簡単です。ある映像を視ていただき、その上でまだ別々にすると言われるのであれば、彼女達は貴殿方におまかせします。・・・ですが少しでも何かを感じて頂ければ彼女達は私が引き取ります。何か異論はございませんか？」

まくしたてる様に用件を言い、反論が無いことを確認後、手中に有るボタンを躊躇なく押した。直後、変化は始まった。カーテンが閉まりスクリーンが降りてきてある映像が写し出された。そこには三人の姪っ子達のために奮闘する祐太、六畳間という狭い中で元気に動き回るひなちゃん、いつも笑顔でムードメーカーの役割をしている美羽ちゃん、試行錯誤ながら料理を作る空ちゃん、そして四人の笑顔がそこにあった。

映像が終わり大半の人から「彼等を一緒に住ませて良いだろう」という声が聞こえるなか、小数からは「我々が引き取る」という声が上がった。小数のほとんどが中年肥りしたどこか卑しい目をした人だった。

side 虎牙 out

side よし子

映像を見て私は彼等を一緒に住まわせようと大半の人は思い行動に移そうとした時、小数ではあるが反対意見が出された。その人達は卑屈な目をしている人で何かしらの裏があるように感じられた。反対をを予期していたのか虎牙君は、おもむろに、しかし威圧するかの如く語りだした。

「その人達は何故反対なんでしょうか？・・・その解答も調査しました。あまり荒事にしたくなかったのですが、仕方ないですね・・・」  
・反対意見の方々は政治家および資本家等の週刊誌に叩かれ安い方々とお金に困っている方々に分かれず。そして・・・」

彼は彼自身の情報網を使い調べた結果を淡々と語った。それは人権を無視した活動に、反対した人の内数人が参加しているというものだった。

side よし子 out

side 信好

私達親族は空ちゃん、美羽ちゃん、ひなちゃんの事を考え児童施設に入れる事を進めていた。だが、ある青年が、ひなの父兄参観当日に保育園の近くにある集会施設に集められ、空ちゃん達が今住んでいる瀬川祐太という青年のアパートでの生活の様子を教えられた。無関係と思っていたが祐太君もまた、世界でたった一人の姉を亡くしている事をこの時始めて気が付いた。姉の死を受け入れたかどうかは分からないが、自分の事より姉の宝である姪っ子達の事を思い

遣る彼の優しさに、心打たれ『彼等を一緒に住まわせてもいいだろう』と考えていた。

しかし、親族間でも悪いウワサしかない『卓郎さん』と『雅道さん』を含めた政治家や資本家が反対意見を言い始めました。しかし、この場に我々を呼び出した青年は落ち着いた様子で淡々と語りだした。それは親族としてやってはいけない愚行の数々であった。

side out

信好

side 虎牙

反対意見を言っている中に『卓郎』と『雅道』を見付けると彼等が行なった愚行を淡々と語った。二人は赤くなったり青くなったりとしていたが、シビレを切らしたのか『雅道』の方が怒鳴りだした。

「何を証拠にside証拠ならここにある!!!」・・・なに!？」

数枚の写真を彼らに見せると青ざめ始めた。写真の中身は彼らが行なった愚行の決定的瞬間だった。

「このような行いをする人間に、彼女達の親族を名乗る資格は無い!!!」

強く断言し周囲が静まりかえった。そして射殺すかの如く睨み突けながら、ただ一言言い放った。

「もう彼女達の前に現れるな!!!!!!」

『卓郎』と『雅道』は俺の正体に気付いた様で、勢い良く立ち上が

ると一目散に出口に向かって行った。

side 虎牙 out

side 卓郎&雅道

俺達は親族を集めた男の正体に気付いた。『何故ここにヤツがいる』  
混乱した頭で考えても答えは出なかった。あの殺気は間違えなくあの『黒き修羅』だ。ヤツが居るならもう一人あの『堕天使』も近くにいる筈だ。【逃げなければ逃げ切らないと】そんな脅迫観念に襲われていると、透き通った声に呼び止められた。

「そこ行くお兄さん達。そんなに急いでどこに逝くの？」

その声を発したと思われる見た目小学生の女の子はニコニコ笑いながらこちらに向かって来た。その様子に啞然とする俺達。俺達は全速力で走っている。なのにその子は並走しているのに、息切れせずに笑顔で話し掛けていた。そして見た目の年齢とは不釣り合いの微笑みを浮かべると、おもむろに両手をこちらに向けてきた。両手にあるモノを確認すると同時に全身の血の気が引くのが感じ取れた。そこには、二丁の拳銃が握られていた。その時俺達は気が付いた。

.....この子が『堕天使』なんだと.....

俺達は一発ずつ頭を射たれ絶命した。

s i d e 卓郎&雅道 o u t

s i d e 堕天使

あゝあまた殺っちゃった。

私を楽しませてくれる、面白い人はどこにいるのかなあゝ  
アハハツアハハツアハハツ・・・・・・・・・・  
彼女は一人眩くと渴いた笑い声でどこかに帰って行った。

s i d e 堕天使 o u t

### 13話（後書き）

今後は後半にあった様な残酷なシーンが増えると思います。  
ご意見感想お待ちしております。

## 14話(前書き)

書き上がったので投稿します。

では本編スタートです



## 14話

No side

これは夢だと分かっている

この場が地獄だと分かっている

これは過去だと分かっている

この場で出会ったと分かっている

哀しき慟哭と場違いな笑い声

彼女は狂喜の笑みを浮かべ

彼は憎悪に身を委ねて

だがそれを相手に向ける事なく

ただ嘆く

出会った偶然

それが災厄の始まり

周囲にあるは人だったモノ

真っ赤な大地に立つは二人のみ

ただこの光景を作り出した彼女

それを睨む彼の腕の中には同じ年ぐらいの少女の死体がある

・・・もう動かない体を揺すり続ける彼は気付く

・・・もうあの笑顔は戻らない

・・・もうあの声は聞こえない

・・・もうあの暖かい場所はない

・・・もう・・・彼女には・・・会えない

彼は只涙を流し

空に向かって吠える

No side out

side 虎牙

冷や汗を流しながら座っていたベンチから立ち上がった。

「嫌な夢だ。もう会えない奴の事をまだ思い続けるなんて、我ながら女々しいなあ。」

あの後、残ったよし子叔母さん達は祐太と空ちゃん達と一緒に住まわせる事を祐太に伝えるために保育園の方に向かった。俺はここ数週間寝る間を惜しんで情報収集していたので、さすがに疲れたので『休憩してから向かう』と告げて、近くにあったベンチに座っていた。

だが、思っていたより疲れていたのかゆっくりと船を漕いでいたようだ。ふと辺りを見渡すと、遠くの方に祐太達が抱き合い涙を流していた。作戦が上手くいったことがわかった。

それを確認すると同時に携帯を出し、情報屋のジョンに報酬とお礼の連絡を入れながら祐太達の元に向かって行くと、嬉しそうな声が聞こえてきた。

それを聞くだけで俺が裏で親族達を説得していた事が報われる様だった。落ち着いた様に感じたので話し掛けた。

side 虎牙 out

side 祐太

数週間前の会合の後いろいろな事を考えた。だけど、今の自分には空ちゃん達を育てるだけの経済力はない。

彼女達と一緒に住むことは難しい。そんな事は最初から分かっていた。だけど姉さんが愛した娘達を、離れ離れにすることなんて頭の中にはなかった。

虎兄はそんな俺の葛藤を知ってか知らずか、手を貸してくれると言って手を差し出してくれた。

ひなの父兄参観の当日、虎兄は『用事があるから見に行ってきたな』そう言っつていつもより早くアパートに来て、早々に帰ってしまった。父兄参観の途中にある昼食の時、ひな、空ちゃん、美羽ちゃん、そ

れから俺と葉花さんという大勢での参観という事もあり、大いに目立っていた。なかには物珍しそうにジロジロ見てくる親御さんもいた。

だが、そんな些細な事は気にならなかった。

そしてひな達と話し、彼女達のパパとして抱きしめていると声をかけてくる人がいた。

「……………まったく。他のご家族もおられるんですから、いい加減になさい」

「……………え？」

その人はスーツを着て、精一杯おめかしして……………化粧をグシャグシャにして泣いている叔母さんだった。

「叔母さん……………どうして」

「どうしてって、ひなさんのお遊戯を拝見しに来たに決まっているでしょう！」

「だいたい、あなたは達学校があるはずなのに何をしていますんですか！」

怒っているんだか笑っているんだか泣いているんだか判らない感じだ。

お弁当を携えているところを見ると、叔母さんもいろいろ考えてくれていたらしい。

「それに私だけじゃありませんよ」

叔母さんの視線の先には義兄である信吾さんのお兄さんらしい小役

人の人や、数人の親戚がいた。  
みんな、きてくれていたのか……

「伯父さん……」

「空……許してくれ。叔父さん達はな……」

「ううん、いいんです。ごめんなさい。ワガママ言っでごめんなさい」

空ちゃんは、そう言いながらも俺に強くしがみつく。

「……彼が話していた事は本当の様だな。」

呟く様に言われたその言葉がやけに耳に残ったので質問してみた。

「あの……彼が話していた事」ってどういうことですか？」

その質問に叔母さんは、保育園の外にあるある場所を見て、優しい目をしながら言った。

「あなたのよく知る人物よ。……そう世界を敵に回してもあなた達を守ってくれる……そんな心強い味方よ」

誰の事が解らず首を捻っているとひなが保育園の校門(?)の方を向き、笑顔を浮かべ大声で叫んだ。

「虎牙おいたん!!!!!!」

ひなが向いている方を見れば疲れた様子の虎兄がこちらに向かって来ていた。

その顔は、勤めを果たしたという充実した感じと疲れきった感じもした。

虎兄が裏で何かしたのかもしれないが今はただ一言言いたい。

「「「お疲れ様!!」「」」

俺と空ちゃんと美羽ちゃんはそう言いつつ虎兄の元に駆け付けた。

s i d e   祐太   o u t

## 14話(後書き)

ご意見感想お待ちしております。

15話(前書き)

修正しました

本日もできたら投稿してみます

では本文スタートです



## 15話

あの娘は暖かく俺を受け入れてくれた

あの場所が始まり

あの娘は優しく俺を癒してくれた

あの時が始まり

いくらでもあの娘との思い出はある

けど行き着くは悲しき終焉

side 祐太

「ただいまー！」

玄関を上がるなり、ひなが大きな声で叫んだ。

久しぶりに響いた元気で明るい声は、まるで明かりをつけたみたいに、広い家を一気に明るい雰囲気に変えた。

姉さん達が残してくれた家。今日からここで俺達五人の新しい生活が始まる。

side 祐太 out

side 虎牙

参観日から数日後、よし子伯母さんと信好伯父さんとともに俺を訪ねてきた。

空ちゃん、美羽ちゃん、ひなと俺と祐太が一緒に住むことに反対するのかと思い、少し殺気立つがよし子伯母さんと信好伯父さんは微笑を浮かべていた。

「狭いアパートに五人で暮らすのはいろいろ問題も多いでしょう。まして、あの子達はこの先どんどん難しい年頃になっていきます。男のあなた達と同じ部屋で寝起きするのは教育上よろしくありません」

「ああ。その事なら祐太を空ちゃん達の家に移しさせるつもりです。」

「あら、あなたはどうするつもりです？」

よし子伯母さんは俺がいるモノと思い、話していたらしく少し戸惑いながら訪ねてきた。

「一応は祐太、祐太の友達達と話し合ってみて、余裕があれば近場の旅に出てみようと思ってます。」

「……………えっ!!」

今後の行動を話してみたが予想外な事を言われ信好伯父さんは、一瞬ショートしたみたいだった。

よし子伯母さんはまたかとも言いたげな、ため息を漏らし少し呆

れた目でキツイ事を言った。

「……………祐理さんの事もあるから旅は辞めた方が良いわよ」  
その事を聞き反論しようとした時、辛辣な事を言われた。

「それに今年で23歳なんだから結婚の事も考えて彼女を作りなさい。これは祐理さんも心配していた事なのよ。」

「ぐっ」

耳も心も痛い言葉を受け、暫くガックリとしていた。  
あろう事かお見合いを取り仕切ろうという話も上がったが、丁重に断わりをいれ挨拶もそこそこに別れた。

side 虎牙 out

side 信好

あの参観日の姿とは違い、面白かった。そんな事を思っていると一緒に彼に会いに来たよし子さんは、額に浮かんだ冷や汗を拭いていた。

「何故そんなに緊張しているんだ」

事前に歳も近い事から砕けた口調で話す事を決めていたので、何時もと違う所を聞いてみた。

「……………そうですね。おかしいですよ……………ですが

仕方ないんです……彼の過去を少しだけですが知っていますから……」

何か哀れんだような、それでいて悲しいそんな目をしながらそう言い、顔を伏せるが数秒後に上がると何時もの顔に戻っていた。

『彼の過去』それは今日会いに来たあの男の事だろう。

それが何故あんな悲哀の表情になったのだろう。

少しだが彼の過去が気になってしまった。

s i d e 信好 o u t

数日後俺と祐太は、小鳥遊家に引っ越す事になった。

そこからまた新たに始まる新生活に期待を膨らませ、今はただここにいる祐太、空ちゃん、美羽ちゃん、ひなを守るため頑張ろうと気合いを入れ直すのだった。

15話(後書き)

ご意見ご感想お待ちしております

次回もお楽しみに

## 16話(前書き)

少し短いですができました

栞との再開直前という感じのつもりです

では本文スタートです

## 16話

side 祐太

家族にも、秘密はある

それは、いいことなんだ。たぶん

一緒に暮らすからこそ、必要なことかもしれない

とはいえ……あんまり驚かさないと、ありがたいな

side 祐太 out

side 虎牙

「……ちやだめー！」

早朝から池袋の端っこにある閑静な住宅街に女の子の声が響き渡った。

住人の大半が、大昔からこの辺りに住んでいる人か、比較的裕福な人のどちらかであり、池袋という繁華街の外れにありながら意外なほど静かで治安も良い。

時刻は早朝。恐らく、悲鳴の様な叫びは隣近所にもしっかり聞こえた事だろう。

『大方開かずの間になっている祐理姉さんの部屋にでも見ていたんだろ。』と勝手に決めつけ、手を止めていた今日から行く職場の用意と朝食を再開し始めた。

「虎牙さんはどんな仕事をしてるんです？」

朝食が出来上がり食卓に持って行くと椅子に座っていた美羽ちゃんが聞いてきた。『まあアパートにいた時は帰って来たら何時もいたから不思議に思っていたのだろう』と勝手に解釈して当たり障りの無い事を答えた。

「学校の清掃員さ。」

「……………その仕事ってきつくはないですか？」

この家で一番年上のため気を使っているのか、少し不安げな表情で聞いてきた。優しい子何だと改めて思い頭を撫でながら余裕の笑みを浮かべて答える。

「きついもんか。皆の幸せの為に仕事をしているんだ。だから心配しなさんな。……………それに清掃員の方が給料高かったし、アイツとの約束も守れるしな」

最後の方は聞こえない様に話した。その後早く職場に行かなければならなかったので、準備もそこそこに家を出た。

s i d e 虎牙 o u t

s i d e 美羽

虎牙さんの仕事が気になり聞いてみると『清掃員』という答えだった。答えた時の虎牙さんは何か悲しい事があつたかの様に沈んだ表



情をしていた。消えてしまいそうな感じがして大丈夫か聞いてみたが、無理矢理笑った様な顔で頭を撫でながら「大丈夫だよ」と言っていました。しかし、話の最後の方に「それに清掃員の方が給料高かったし、アイツとの約束も守れるしな」なんて呟いていました。本当に大丈夫なのは分かりました。けどそれは私達と友達との約束の範囲で言っている事になんともなくですが、気付いてしまいました。

side 美羽 out

side 虎牙

職場である会社に着き、始めに自己紹介をした後担当の高校に向かった。以前にも同じ様な仕事をしていたので、作業事態は早くできた。研修期間を省略して勤める事になった。

side 虎牙 out

side 北原栞

今日は全校集会があり、先生の長いだけの話を聞いていた。友達とヒソヒソ話をしている内に話が終わり、「新たに二人の清掃員を雇った」という事で清掃員の方が紹介された。その人は、いつかチンピラから守ってくれた人だった。

side 北原栞 out

16話(後書き)

呼び方について書いてなかったので書いておきます

小鳥遊 空

祐太・・・お兄ちゃん

虎牙・・・虎牙さん

小鳥遊 美羽

祐太・・・おじさん

虎牙・・・虎牙さん

小鳥遊 ひな

祐太・・・おいたん

虎牙・・・虎牙おいたん

という感じかな

ご意見感想ご指摘等もお待ちしております

## 17話(前書き)

やればできました

最近、本当に調子が良いです

この調子で行けるところまで行ってみます

では本文スタートです

## 17話

彼女は歌う

人々に希望を与えるために

彼女は笑う

人々に笑顔を与えるために

彼女は叫ぶ

人々を導くために

彼女は人々を救済し、より良い未来へ導く

だが彼女の前には試練の山が連なっている

彼女は諦める事なく突き進む

その先には絶望の未来しか無いのに

彼女はただ進み続ける事しか思っていなかった

side 北原栞

「あ、あの!!!」

私は全校集会の後急いで、『黒き修羅』と呼ばれていたあの人に会いに行きました。

清掃員室の前で会えたので声をかけました。『もしかしたら忘れているかもしれない』とも考えましたが、そんな些細な事を気にせずただ再開できた事が嬉しくて、そんな行動をとってしまった。

side 北原栞 out

side 虎牙

清掃員室の前で呼び止められた。その人は帰国した時ヤクザに絡まっていた女の子がいた。

「久しぶり。あの後、大丈夫だった？」

一応は片付けたが、あの後どうなったか知らずにいたので確認をした。

「・・・もうあの時の様なヤクザは会っていません。・・・あ、あの、あの時はありがとうございます。」

彼女は恥ずかしいのか、少し頬を赤らめながらお礼を述べた。

『あの娘の様に可愛らしい美少女だ』と思ったが、それは『あの娘にも目の前にいる彼女にも失礼だ』と思い直した。

side 虎牙 out

side 北原栞

お礼を述べると彼は懐かしそうなそれでいて悲しげな目をして私を見していました。

・・・いいえ、何か違いました。その何かはこの時はわかりませんでした。

後になって私は『彼が、私越しに誰かを見ているんだ』と気が付きました。

side 北原栞 out

side 虎牙

5時に仕事が終わりに、帰宅している途中で祐太と美羽ちゃんから『ひなを迎えに行つて欲しい』と連絡があり、ちょうど保育園の近くだったので『了解』と返信し足早にひなが待つ保育園に向かった。保育園に到着すると門の所にいた保育士さんが話掛けてきた。

「あら？今日は虎牙さんがお迎えなんですか？」

一応彼女達の保護者という事で各学校の先生には挨拶は済ましていた。その中で一番友好的だったのが、彼女『仲里雪』だった。歳も近いせいかわいらしくと話し掛けて来てくれる。

「ひなちゃん。虎牙おいたんが迎えに来てくれましたよ」

そう言っている方からタトタトと走る音が聞こえてくると、次に起

こるであるう事に身構えた。

「虎牙おいたくん!!」

そう呼ばれたかと思うと真横から勢い良くひなが抱きついてきた。ひなをしっかりと受け止めると少しだけ注意した。

「ひな。跳び掛るのは別に構わないが、もう少し場所を考えような。」

「うん!! わかった!!」

そう言いつつ頭を撫でるとニッコリと花が咲いた様な笑顔に向けて頷いてくれた。

その光景を近くで見ていた『仲里雪』は『この人はやっぱりタダ者じゃない』と思った。

「では、今日もお世話になりました。」

「雪先生!! さようなら!!」

そう言ってひなと手を繋いで家に帰りました。

side 虎牙 out

side 美羽

おじさんにひなのお迎えをお願いしようと連絡すると、何か学校の

単位(？)がヤバイみたいでそれどころじゃないらしく、帰宅途中であるう虎牙さんに連絡しました。返事はただ簡潔に『了解』の一言だけ、今日仕事があったのならその事の感想何かを入れても良いのになんて思いつつ、夕食の準備を進めた。三十分ぐらいたった時、玄関が開く音がした。

「ただいま」

案の定虎牙さんとひなが帰ってきた。今日の夕食当番は虎牙さんだったのを今更ながら思い出し、リビングに入って来た虎牙さんに向けて謝った。

「・・・ふう。そうか、なら今日はもう仕方ないから今度からは確認しときなよ。」

そう言つて微笑みながらひなの相手をしていた。

その姿が何故か愛しくておとうさんとダブって見えた。

side 美羽 out

side 虎牙

祐太が大学で留年の危機を迎えていることを知りあるやつに連絡を入れた。

side 虎牙 out



side 佐古俊太郎

私はいろいろな人脈を持つて大学生活を大いに楽しんでた。特に後輩の瀬川祐太君が入部してからは花が咲いたかの様な華々しさがある。

そんな事を考えていると携帯電話からいきなりターミータの電話の着信音が流れ出した。この着信音を登録している人を思い出し急いで出ると（この間2秒）脅され（・・・）ながらではあるがある事を頼まれた（・・・）。

それは自分の方でも考えていた事なので、了承した。

・・・まさか祐太君が彼の知り合いだったとは・・・  
会話を終えると、そんな風に思っていた。

side 佐古俊太郎 out

## 17話（後書き）

今回は『仲里雪』という人物を出しました

一応ヒロインではありませんが準々ヒロイン位の立ち位置です

虎牙の良き友達といった感じですよ

容姿等はいつか新たにプロフィールを作り出します

（その他の出演した人物も一緒に）

ご意見ご感想ご指摘等お待ちしております

## 18話（前書き）

寒くて手が冷たくなって辛い季節になりました

コタツに入っていると、小学生の時はミカンの食べ過ぎで足が黄色くなっていたなあ。などと考えてしまいます

では本文スタートです

## 18話

明るく活気ある町

一人の少年が訪れる

少年は傷付いていた

ボロボロのココロとカラダ

身に付けた衣類はココロとカラダのようにボロボロ

不審な彼を町の住人は歓迎しました

傷を直し去ろうとする彼に住人達は言いました

『君は傷付くのは恐くないのか』

彼が去ろうとした先は、長い道のりで途中に盗賊のネグラがあつたのだ

彼は不適にだが悲しげに呟く

『一宿一飯の恩はその身で返せというのが家訓でね。だから、町を脅かす盗賊のネグラを潰すって位はしないとな』

そして振り返り

『じゃあな。生きていたらまた会おう！』

そう告げると振り向きもせず歩き去った

side 栞

夏のはじめ頃までは賑やかな音に満ちていた向かいの家は、ある日を境に一変してしまった。

雨戸を閉ざし、笑い声ひとつ聞こえてこなくなった。

聞いたところによると、ご家族に不幸があったという。さほど深いご近所付き合いがあったわけではないが、それでもあの幸せそうな家族の姿を見られないかと思うと、なんとも切ない気持ちになった。が、つい先日、あの家にまた賑やかな音が戻ってきた。

不幸があったというのは自分の聞き間違いで、長い旅行にでも行っていたのだろう。

そう思って密かに安堵していたが、あの愛らしい三姉妹と一緒にいたのは、優しそうな父親でもなく、明るくはつらつとした若い母親でもなく、見るからに軽薄で頼りなさげな若い男だった。

真相を、突き止めてやる。可憐な野獣の牙から守るために。

そう誓う私は昨日見たＴＶドラマのヒロインのように勇敢な気持ちになっていた。

side out

side 虎牙

就職初日が終わる時ある事に気付いた。それは最重要なため早めに終わらせるために、近くにあるスーパーで蕎麦を20個ほど買い占

め、隣近所向こう三軒に引越しのご挨拶と今後からよろしくお願  
いしますということを伝えた。

『円滑なご近所付き合いができないと、祐太達と暮らしてる内に困  
った時の相談ができない』という考えで行動した。  
三年間の旅行で培った経験が、生かされたと思う出来事でした。

side 虎牙 out

side 祐太

留年の危機がある事を佐古俊太郎（クソブタ野郎）に諭される。学  
園祭が近いので強制的に連行される。まあ、この辺りまでいい。  
だが、学園祭まであと二週間しかなかったり、何をするか何も決ま  
っていないのはいただけない。それも

「会長が忘れてた」

という事だから呆れ返ってしまう。そして何より許せないのは今日  
は帰れそうにないことだ。

side 祐太 out

side 空

今日は虎牙さんと一緒にカレーを作る日で、お兄ちゃんが何時もよ

り早く帰ってくる日でもある。私が制服の上からエプロンを着ようとする就先に帰って来て、私服姿でバンドナを巻いた虎牙さんに注意を受けました。

「……空ちゃん。制服が汚れるから着替えて来なさい。」

「けど、お兄ちゃんが早く帰ってくるからいさ」着替えて来なさい。  
「ッ」

繰り返し言われた時、有無を言わせない口調で言われしげしげでありましたが、私服に着替えて来ました。  
リビングに戻った時電話が鳴っていた。この時間帯に電話して来るのはお兄ちゃんしか考えられなかった。

私が急いで出ると予想道理にお兄ちゃんからの電話だった。

「はい、小鳥遊です！」

『もしもし……空ちゃん？』

「お兄ちゃん？あのね、今虎牙さんと一緒に夕飯のカレーをた『ごめん！』」

「え……」

『実は、学園祭の打ち合わせで今日はもう帰れそうもないんだ』

「そ、そう、なんだ……」

『本当にごめん。悪いけど、夕飯は四人で食べて。』

「……うん。わかった。お兄ちゃんも頑張つてね。こっちは大丈夫だから！」

無理矢理元気を振り絞り、そう言って受話器を置いた。

「電話の相手は祐太か？」

虎牙さんが聞いてきた。

「はい……」

私の表情と態度からある程度わかったのか

「……それじゃあ、アイツを唸らせる程のメシを作ろうか？」

お兄ちゃんが驚いた顔が見たくて私はすぐに頷いた。

side out

side 虎牙

今日の仕事も終わり、ひなと一緒に夕飯の食材を買って帰った。割り当てられた部屋で私服に着替え、バンドナを巻いてリビングに行く。と空ちゃんが制服の上からエプロンを着ようとしていた。注意を二度程するとすぐに着替えに部屋に戻ったみたいだ。空ちゃんが部屋に戻っている間に夕飯を準備していると電話が掛ってきた。

電話は祐太からで『今日はもう帰れそうもない』ということだった。



落ち込んでいる空ちゃんを祐太を驚かせようと誘った。返事に頷いてくれた。

s i d e 虎牙 o u t

## 18話(後書き)

この調子で土日以外は更新していきたいと思います

ご意見感想ご指摘等お待ちしております

## 19話（前書き）

更新しました

一日で構成を練るのは難しいですねえ

毎日更新されている方の努力（？）が少しですが分かってきたつもりです

今週も出来るだけ平日に更新していきます

そう言えばいつの間にか10000PVを越えていました

記念に何か書くべきなのでしょう

何かしてほしいシーンがあれば感想欄に送って下さい

では、本文スタートです

19話

風は吹く

何時もと変わらず

雨は降る

何時ものように

太陽は昇る

希望の象徴のように

五感を刺激する全ては

何時もと変わらず

ただ

隣に居るべき人は

消えてしまった。

side 美羽

私とひなは虎牙さんとおじさんの帰りをリビングで待っていた。何時もの時間になっても虎牙さんは帰ってこない。どうしたのかと心配し始めていると突然電話が鳴り始めた。

「はい！もしもし、小鳥遊です。」

『その声は美羽ちゃんか？』

「どうしたんですか？虎牙さん」

虎牙さんからの電話に驚きながら私は何故か無性に嬉しい気がした。

『ごめん！・・・今日から数日帰れそうにないから俺抜きで食事をしてもらっても良いかな？もちろん、食事は作りに戻るから安心していいよ。』

「・・・そうなんですか・・・早く帰って来てくださいね。」

『ああ。本当にすまない。夕飯はコンロの上にある鍋に作つてあるから、レンジかコンロで暖めて食べてくれ。・・・早めに帰れるよう頑張るから・・・』

虎牙さんがいない事に不安を覚えてしまいが、私達のために走り回っている姿が目に見えた。その姿が微笑ましく見え、頑張ろうという気持ちになった。

side 美羽 out

side 虎牙

「ハァー」

ため息を吐き、目の前にいる筋肉達磨に

「おい、変態達磨。俺の今日これからの予定を変更させてでもお願いしたんだ、もし下らない事だったらビルの屋上から逆さまに吊すからな。」

少々殺気の籠った目で問掛ける。

「この始末は俊ちゃんにしてよお。私はただ『あなた虎牙を呼んで来い』  
っていう俊ちゃんの命令を聞いただけだからあ」

言い訳にそんな事を言われ『久々に潰しとくか。』なんて考えていると、バーのドアが開き祐太とイケメンと生け贄が入ってきた。生け贄を見付けると立ち上がり極々自然に近付くと、コブラツイストを掛けそのまま頭丁部から地面に叩き衝けた。のたうち回っている生け贄に足で蹴り起こしながら、祐太と一緒に入ってきたイケメンに挨拶した。

「こんばんは。あなたが仁村造一さんか？祐太とこのゴミから聞いている。なんでも料理が上手で世渡りも上手いとか。・・・まあ付き合いが長くなるかもしれないが、よろしく。」

「ああ、こちらこそよろしく。」

微笑しながら、握手を交わしていると、踏んでいたゴミが

「あ、あのお話をs」なんだノミ以下。話があるならまず、するところがあるだろうが。」っ、ごめんなさいですサー」

侮辱を込めた目で話を折るとびびったように、冷や汗を流しながら謝罪してきた。

「今回は、初対面の人が居るためこのくらいで済ませたが、今度同じ様な事をしたら生き地獄を見せて殺る。わかったか？」

「サーわかりましたサー」

顔は青ざめ、冷や汗の量が凄い事になっているゴミに再度念を押し  
た。

その後、祐太がなにか言いたそうな風にしていたので話し掛ける事  
にした。

s i d e 虎牙 o u t

19話(後書き)

「ご意見」「感想」「指摘等お待ちしております」



## 20話(前書き)

更新しました

毎日頑張って構成を考えていますが、頭がパンクしそうなんです。ですが、今年中に三巻〜四巻位まで書き上げたいです。

では本文スタートです。

## 20話

暗く冷たい世界

そこが俺の原点

暖かく明るい世界

それが彼女の原点

たくさんの友達との出会いと別れ

繰り返される現実

終りなき欲望は人を

幸福な未来へ導くかそれとも災厄の破滅へと誘うか

side 祐太

佐古先輩に連れられて行った場所に虎兄がいた。虎兄は佐古先輩にコブラツイストをした後、頭丁部から地面に落とされた。優しいから忘れかけるが、この人は熊ぐらいは簡単に倒せる人なのだ。佐古先輩をある程度絞めてすっきりした顔でいる虎兄に

「虎兄はこのh「クズのことか？」うん。知り合いだったんだ。」

「ああ・・・人間のダメな部分の集合体がこのクズだ・・・ただな、変に人間関係を作るのが上手いから情報屋とかするばいいんだが・・・あんな変態行動がなくなればクズから人として扱ってやるだがなあ。」

虎兄はあまり人を褒めたりしないのだが、褒めるといふ行為だけでも驚きに値する。『本当に佐古先輩にはお世話になりっぱなしだなあ』なんて事を考えていると『ヒロミちゃん』と呼ばれた筋骨竜々の化け物が

「誰が、腕の筋肉が子供の胴体程ある化け物ですつてえ!!」

「うわあ!!来るな!!寄るな!!妖怪筋肉達磨!!!!」

心に思っていた事をズバリと当てられ内心動揺してしまっただが、動揺が知られればいじられる事は目に見えている。そんな事を考えていると虎兄が帰る用意をしていた。

「虎兄。そういえば仕事はもう終わっている・・・それに二人も居るんだ俺が居なくても問題無いと判断したので帰宅準備をしているだけだ」・・・ですよね」

虎兄だけ先に帰る事になり、少し不満が有るが元々虎兄が家事の全般を任せているので口出ししづらい。そんな俺の葛藤に気が付いたのか、虎兄は昔からするように頭に手を置き、幼子に言い聞かせるように話だした。

「お前の成長を促すためなら俺は敢えて悪役になろう。だから、今

は大学生生活を乐しめ。……俺には無縁の世界で自分を貫いてみる……祐太」

最後の方は聞き取れなかった。だが、仁村やヒロミちゃん・佐古先輩は聞こえていたらしく微笑んでいた。

side out

side 虎牙

あの後ニヤニヤして話し掛けるクズが気に入らなかったので、縛り上げ天井から吊して帰った。予定より早く帰宅するとキッチンの方から何やら焦臭い匂いがした。火事かと思いい慌てて靴を脱ぐと、すぐにキッチンに駆け込んだ。

そこで目にしたのはクロコゲの何かの前で慌てている空ちゃんと美羽ちゃんがいた。

二人は俺に気付くと顔を青ざめ冷や汗を流し始めた。時刻は21時15分まだ起きていても問題ない時間だ。『なぜそんなにビクついているのだろう?』などと考えていた。

「……どうしてそんなにビクついているのか知らないが、俺は君達がケガをしない程度なら赦すから安心しなよ。……ただまあ、人の道に反する行為なら怒るけど、今回は俺や祐太のためにしたんだから許すよ。」

「ごめんなさい。……おやすみなさい。」

二人は俺に謝罪すると寝る前だったのかすぐに部屋に戻って行きま

した。

s i d e  
虎牙  
o u t

## 20話（後書き）

今回は美羽、空視点でお送りします

ご意見感想ご指摘等お待ちしております

して欲しいシュチュエーション等ありましたら感想欄等に送って下さい

## 21話(前書き)

遅れてもうしわけない

予告通り空と美羽 *side* の話しになります

皆さん風邪引かないように気を付けて下さい

では本文スタートです

## 21話

side 美羽

虎牙さんが今夜は遅くなると連絡をいれてから数分してお姉ちゃんが帰ってきた。

「ただいまあゝ……………どうしたの美羽」

「……………えっ？」

知らないうちに気持ちが落ち込んで暗い顔になっていたようでお姉ちゃんに心配を掛けてしまった。

「なんでもないよお姉ちゃん……………そうだ今日は虎牙さん遅くなりそうだからって連絡があったよ。」

納得といった感じで頷きだした。

「あれっ？じゃあ夕飯はどうなるの？」

虎牙さんの心配より夕飯の心配をしているお姉ちゃんにイラツとしたが、不意になんでイラツとしたんだらうと不思議に思った。

side 美羽 out

side 空



家に帰ると暗い顔をした美羽がリビングにいた。何故暗い顔になっているか自分でも分からなかった様子で、虎牙さんが夜遅く帰ってくる事を話した。

最近虎牙さんが作った夕飯を五人で食べていたのに、その内二人もいないのは何か寂しい気持ちになった。

暫くして夕飯の時間になったので三人分をコンロで温め直し食べました。

食事も入浴を済ませて寛いでいると電話が掛ってきました。電話に出た美羽は本当に嬉しそうに笑みを浮かべていました。

side out

side 美羽

寛いでいると電話が掛ってきました。相手は虎牙さんで予定より早く終わったので帰宅するからという連絡でした。何故だか嬉しくて笑みを浮かべているとお姉ちゃんが

「虎牙さんが帰ってくるって聞いて嬉しそうだね。・・・美羽は、虎牙さんの事好きなの？」

「・・・たぶん違うと思う」

自分の気持ちが無なのか判らないが、今はただ『近くにいて欲しい』と思うだけ・・・

「そんな事言ってるけどお姉ちゃん方こそおじさんと虎牙さんどち

「らが好きなの？」

少しからかった復讐をかねて聞いてみた。お姉ちゃんは恥ずかしかったのか、顔を赤らめて伏してしまいました。からかうのもここまでにしようとした時

「わ、私は二人とも好きよ。」

そう言われ私は頭が真っ白になった。

side 美羽 out

side 空

美羽がからかい気味にお兄ちゃんと虎牙さんのどちらが好きかなんて聞いてきた。二人とも優しいし心強い所があったりするので、好きになるのは仕方ない。

「わ、私は二人とも好きよ。」

と思い切って言うてみた。すると、美羽が突然アウアウ言い出した。どうも頭が真っ白になったみたいだ。

落ち着かせるために戸棚にあったコップに水を汲んできた。美羽が飲み終わったコップを見るとそれは美羽がいつも使っているコップではなく、虎牙さんがいつも使っているコップだった。その事に気付いたらしく今度は顔を真っ赤にして、失神していた。

s i d e 空 o u t

s i d e 美羽&空

そんなこんなしているうちに夜も更けてきた。

そろそろ虎牙さんが帰ってくる時間になってきたので、夕飯を暖めようと思いました。ですが、夕飯から暖めていたようでクロコゲになっていました。

そんな時虎牙さんが帰って来た。

怒られると思った。

だけど、虎牙さんは微笑し話し出した。

「どうしてそんなにビクついているのか知らないけど、俺は君達がケガしない程度ならある程度なら赦すから安心しなよ……ただ、人の道に反する行為なら怒るけど今回は俺と祐太のためにしたんだろ？……それなら怒れないよ。」

その言葉と虎牙さんの悲しげな瞳を見たとき不覚にもときめいてしまった。今は彼を直視出来そうになかった。

「「ごめんなさい。……おやすみなさい。」

と言って赤くなった頬を隠すように自分の部屋に戻った。

s i d e 美羽&空 o u t

## 21話(後書き)

ご意見感想ご指摘等ありましたらどしどし送って下さい  
お待ちしております

## 22話(前書き)

遅れました

今年も残りあとわずかになりました  
風邪などひかずに今年を越したいと思います

今回は祐太のバイト内容が中心です

短いですが本文スタートです

## 22話

暗い路地で悲鳴が響く

金髪の少女に群がる男達

絶望した目で遠くを見る少女

あらがう事を止め神へと祈る

だが祈りは通じない

この世界には神なんていないんだ

そんな絶望の淵で諦めていた少女の前に流れ者が現れた

黒一色の服装の青年に一涙の可能性を掛け、助けてと叫ぶ

青年はこちらを見て現状を確認し、一度だけ頷くと少女を組み伏していた男を、蹴り飛ばし周囲にいた男達数人を昏倒させていった。数分後、周囲を囲んでいた男達の半数程を一人で倒した時、残っていた男達は一斉に逃げ出した。

青年は少女の方を向き、微笑むと去って行った

八王子の朝は寒い。もともと山の斜面に広がっているキャンパスなので、吹き下ろす風を防ぐような高い建物もなく、オマケに一日の内で最も気温の低いこの時間だ。まだ十月だというのに、空気が身を切るように冷たい。何故そんなことを思ってるかというアメフト部キャプテン花村先輩と一緒に、大量のパンを詰め込んだケースを次から次へと搬入するというバイトをしているからだ

「花村先輩！！マジで寒いです・・・・・・・・」

「がんばれ瀬川！・・・・・・・・あと5ケースだ！」

「が、頑張ります」

このバイト、早朝五時から始まるので想像していたよりもはるかにキツイ。寒くて手がかじかむし、なにより配達箇所が多いので一分一秒の作業の遅れが命取りになるというシビアさ。

聞いた話では雪の降る日にこのバイトを体験したアメフト部の現役クォーターバックが終わった時には『二度とやりたくない』と漏らしたとか。そんな状況からすれば、今日なんかはまだマシな方だ。各大学の購買、スーパーなどを花村先輩の運転するトラックで巡り、最後にやってきたのが我が母校。運び入れたパンの代わりに、空になったケースを回収したら本日の作業は終了だ。

「瀬川よ、今日は助かった」

「いえ。虎兄曰く『困っている人がいれば助けよ・・・・・・・・普通の恩を仇で返すようなヤツはいない』・・・・・・・・なんて事を言っただけです。・・・・・・・・それより、バイト代こんなに貰っていいんですか？」

「気にするな！ 八八八！」

俺の背中をバンバン叩いて豪快に笑う花村先輩を見て、『虎兄に少し近付けたかな』なんて考えていた。

side 祐太 out

side ????

成田国際空港に一人の少女とその親(?)が日本の地に足を着けた。

「長かったわね。ジョンソン彼はどこにイルのかしら？」

「お嬢様。彼の現住所は確認しております。焦らずともすぐにお会いできるかと」

その光景はどう見ても、お嬢様と執事に他ならなかった。

執事が告げた事で何かを思い出したのか、うつとりした目でトリップしてしまった。……口元からヨダレが垂れかけても少女の可愛らしさは、失う事がない程だった。二人は周囲に気付いたのかイソイソとその場を離れるのだった。

side ???? out



## 22話（後書き）

最後に出て来た少女の目的とは

ゆっくりと判っていくと思います

ご意見ご感想ご指摘等ありましたらどしどし送ってください

お待ちしております

## 23話(前書き)

今年最後の更新になります

では早速本文スタートです

## 23話

だあ!!!

遠くで叫ぶ声が聞こえる

全員いますぐ逃げろ!!!

蜘蛛の子を散らすように逃げ惑う人々

おい!!あんな聞いていいのか!?

そんな中話し掛ける人もいた

………だがしかし俺は目の前にある光景が信じられなかった

そこにはたくさんの人が折り重なるようにして積み上がっていた

老若男女関わらず積み重なっていた

その中には生者はおらずただ血まみれで　　に穴の空いき体の各部分が損失していた

その屍の中に見つけた………見つけてしまった

自分が愛したただ一人の女性を

だがその体には無数の切傷がそして彼女の胸には　　が空いていた

視界がぐるぐる回る

吐気がする

アハハハハハ・・・

そんな地獄の中に笑い声が聞こえた

いつのまにか周囲に火が付き屍と生者を焼き殺し始めた

ドコまでも楽しそうなその声と業火が人を焼く音を聞きながら俺は意識を手放すのだった

その声の主がこの光景を造り出した事を後に知ることになる

side 虎牙

またあの夢を見た。地獄の中で笑い続ける少女。返り血で赤く染まった服で両手には拳銃とショットガン。腰には50センチのサバイバルナイフ。そうアイツが俺から平和な日常を奪っていったんだ。憎悪に駆られていると部屋のドアが開き美羽ちゃんが入ってきた。

「・・・おはようございまーす。虎牙さん。朝g・・・大丈夫ですか!？」

安心させるために体を起こそうとするが何故か力が入らずベッドに倒れて気を失ってしまった。

side 虎牙 out

side 美羽

今日は休日、いつもなら朝早くから虎牙さんが朝食を作っている。けどなぜか今日に限っておじさんは早朝からバイト、虎牙さんはまだ起きてきていない。

お昼近くになりさすがにおかしいと思い虎牙さんの部屋に行きました。

ノックしても返事がなかったので『ごめんなさい』心の中で謝りながらドアを開けベッドの方を見た。そこには顔色が悪い虎牙さんがいた。

「・・・おはようございまーす。虎牙さん。朝g・・・大丈夫ですか!？」

反射的に挨拶を交しましたが、すぐにベッドに伏してしまった事に気付きました。

なにか病気なのかと思い急いで駆け寄って額を触る。熱が有るようで熱くなっていた。

その後病院に行く事になりました。軽い風邪で一日安静にして寝れば治るとの事でした。

帰宅してからおじさんに連絡を入れると『早く帰ってくる』という事になりました。

昼食は私とお姉ちゃんデシチューとお粥を作り、おじさんは昼過ぎ

に帰ってくるため昼食はいらない。虎牙さんは風邪を私達にうつさないように部屋で昼食をとる事になり、初めての三人での食事になりました。

side 美羽 out

side 祐太

家に帰宅すると何か焦げる匂いがキッチンからした。

空ちゃん達の身に何かあったのではないかと思い、急いで靴を脱ぐとキッチンに駆け込んだ。そこにはお粥を丸焦げにした美羽ちゃんと空ちゃんがいた。

・・・その後事情を聞くと『虎兄を少しでも早く元気になって貰いたくて創作のお粥を食べさせようという事になり、作っていると最後に入れる隠し味を何にするかで口論になり、ふと気付くとお粥が真っ黒になっていた。』ということだった。

side 祐太 out

side 虎牙

ふと目が覚めた。常人では気付かない匂いがした。それは何かが焦げる匂い。

記憶の底に封じ込めた光景が目の前に浮き上がってきた。

その光景の一端を見た瞬間



23話(後書き)

次回は虎牙の狂乱になります

では来年もよろしくお願いします



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0827x/>

---

パパのいうことを聞きなさい！ IFストーリー

2011年12月31日23時45分発行